

神奈川の道德

日本道德教育学会
神奈川支部
令和5年5月28日発行
第22号

日本道德教育学会神奈川支部 道德フォーラム 2023

1. 研究実践発表「道德科における個別最適な学び、協働的な学びの実現へ向けての提案」

門脇 大輔 先生 (立正大学社会福祉学部助教)



新型コロナウイルスに係る臨時休校の影響などにより、「自立した学習者が育っていなかったのでは？」

⇒個別最適な学び、協働的な学び

個別最適な学び	協働的な学び
<ul style="list-style-type: none"> ・指導の差別化(各子どもに最適な学習条件・学習方法) ・学習の個性化(子ども自らが学びを成立) →これらを学習者の視点から整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道德にフィットしている ・多様な他者と同じ空間にいることで行なわれていく。

※双方は往還し、互いの成果をそれぞれに生かすことで教育効果を高めていくものである。

○ 個別最適な学びの学習条件

- ・子どもの文脈に依存していると考えられる。道德において答えは子どもが持っていると考えられるため。
- ・「何のために学んでいるのか」を問う必要がある。
(学習方法→ICTネットワーク指導)

○ 協働的な学びにおける「関係」

- ・状況、条件を成立させていくもの
- ・自己内対話、他者との対話で深めていく。
- ・自己内対話は対話のベクトルが内側を向いている。
- ・他者との対話の時は、相手の立場を考える。
- ・児童生徒、教師の対話のベクトルを調整することが大切。

○ 対話力を高める手立て

- ・日常生活においても実践する。特別活動、総合などの中で「君ならどうする」を常に投げかけ、相手と対話する機会を設ける。
- ・授業展開を柔軟にする。指導案に縛られず、指導過程を変更・調整する。子どものやりたいことに柔軟に合わせる。
- ・45分間先生のルールにのっかっているような授業ではなく、子どもたちが今日はこういう授業をしてみたいということを主体的に提案できる関係性をつくっておくことがよい。

2. 講話「実践家教師と編集者が語り合う道德教育の可能性」

+3名のスピーカー: 梅澤正輝先生(U)
田屋裕貴先生(TY)
元山瑤子先生(M)

高木 聡 様 (東洋館出版社編集部アドバイザー)

(対談の抜粋)

高木(T): 「教師の授業」が成立することも大切だが、「子どもの学習が成立すればよい」という考え方もあるのではないかと。また、タブレットや教師との対話などの学び方、あるいは教材そのものを、子どもが選ぶことも授業の可能性としてあるのではないかと。これは、図工の「造形遊び」の感覚に近い。作品を近くで見たり遠くで見たりしながら、自然と影響を受けていく、そういった道德授業が出てきてもいい。道德は自由で、授業は定型ではなく、様々な可能性がある。子どもがやりたいことを成立できるかという視点も大切になってくるのではないかと。そして、伴走者としての教師の個性・パーソナリティも重要になってくる。

T: 先生は授業イメージを持っていると感じる。先生と子どものイメージがずれていると感じた時はどうしているか。

U: まず問いを持つ。こちらの願いと子どもの願いとをすり合わせる。お互いの問いのつながりや、思いのすり合わせを意識している。

T: 子どもたちによる自分の好きなことのプレゼン活動が、それぞれのスタイルで楽しそうに見え、印象的だった。一人一人が主役になっていた。このような活動をするための工夫は。

TY: 子どもの言葉を受け止める、面白いと思える心を普段からつくる。友達の発言の本気さを感じられるクラス作りが大切。

T: これからどんな授業をやりたいか。

U: 自分から価値をつくれるような授業。自分の身の回りを内容項目と関連させ、感動体験と結び付けてプレゼンするような授業など。

M: 図工のような、楽しさが伝染する授業。途中で変わっていくような授業。相手につられないように、自分だったらどうするか台詞を考えさせる劇をやりたい。

T: 子どもたちが主体になり、学びを自己選択するのが理想である。しかし、「今日はこれが価値」と子どもが決めるのは難しい。子どもたちが主体になったとき、教師の立ち位置は…。

T: 例えば「よりよい集団生活」について、どれだけ偶然的に考えたくさせるか。他領域でも話し合う場面は持てるが、特に心に関するものは道徳で考え合えるようにしていきたい。普段の生活をいかに道徳につなげるか。授業を嘘っぽくしない、教師の力量が試される。これから様々な手法がこの10年に生まれるのではないか。試行錯誤しながら、自分の授業の形を若い先生方にはもってみたい。

3. 講演

「道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～道徳科授業におけるICT活用の視点から～」

山田 貞二 先生（岐阜聖徳学園大学教育学部准教授）

○ ICTと現在の学校教育

・2019年に始まり、コロナ禍によって一気に加速したGIGAスクール構想。文房具としてのICTの使い方、ベストミックスについて考えていく必要がある。

○ 個別最適な学び協働的な学びとは

・トキワ荘(後の有名漫画家たちが、励まし合いながら作品を生み出した共同宿舎)では、一緒に集まってみんなで何かひとつの作品を作ったわけではない。しかしみんなで話し合い、助け合いながら自分の道を切り拓いていった。この過程は協働的な学びに近いものがあるではないか。

○ これからの道徳科授業

・以前は「これが正義だ」「これが正しい」という答えが一つのものであった。これからは、教育実践研究の蓄積からなる学習指導要領とICTの理想的なミックスを考えていく。

○ ICTとアナログのベストミックスとは

・手を上げずとも、ロイロノートなどによる交流も可。
・ジャムボードを使い、色で分類できる事で話し合いの質がより高まっていく。 ⇒この感覚がベストミックス

○ 個別最適な学び、協働的な学びを実現するために

(1) 探究的な学習からのアプローチ

・「センスオブワンダー」(『沈黙の春』)
・教材と出会った際の疑問や不満を出発点として様々なことを考えるのではないか。
・探究のスパイラルを道徳に組み込む。

(2) カリキュラムマネジメントの必要性

・学活や総合などは道徳の単元計画と絡めやすい。

(3) ICT活用の視点からのアプローチ

・目的ではなく手段として、文房具のように使う
・端末に問いを打ち込む、分類するなど、活動の中に自然に組み込むことができる。
・ICTを授業に取り入れている学校では、自分で静かにキーワードを打ち込み、自己を見つめる時間として活用する場面が見られる。適宜、対話などアナログな活動も入れる。

○ 有効的な活用を図るために

・P4C的手法を取り入れる際、35人という人数はやや多く、発言することが難しい。そこで、座席を二重円に配置し、中心で話す子どもたちに対して周りがチャットで入力をしていく。

久しぶりに対面での活動がおこなわれ、直接顔を合わせての実りある会となりました。また、今回はハイブリッド開催であり、遠方にお住まいの方々にもご参加いただけたこと、大変嬉しく思います。次回も先生方と一緒に勉強できることを心待ちにしています。

(詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。) <http://www.doutokukanagawa.com/>